12月1?日：男と生まれたからには誰でも一生のうち一度は夢見る地上最強の───

◆

……うん。イムロンから話だけは聞いていたんだ。話だけは。

───こと、防具作成に於いては自分よりも上のプレイヤーである、と。

「素晴らしい…………鉱石を繊維化する技術………そんなものが存在していたなんて………っ！」

………うん。サバイバアルから話だけは聞いていたんだ。話だけは。

───奴はたった一本(・・)だけの”性癖(きば)”のみでこのゲームの最強防具論争を終わらせた男、と。

「技量(テクニック)にばかり目を向けて、現状の素材に満足しているようでは………ふっ、まだまだ未熟という事か………やはり果ては遠い」

そしてそんな人物が、ウィンプの為に防具を作ってくれると聞いたとき俺は普通に思ったのだ。

───あ、じゃあせっかくキャッツェリアにいるんだし「宝石匠」のスキルで作られる鉱石製の布を持って行ってあげよう、と。仮にウィンプの防具に使われなかったとしてもまぁ感謝のしるし的な感じで……と。

「ありがとう………言葉にすれば数千数万を超えるような感情を、この五文字に込めよう……っ！」

その結果、現在俺は何故かメイド服を着たごついナイスガイに泣きつかれながら感謝されていた。

うーん、分かってた！ メイド服しか作らないのにイムロンより"上"って本人が認めるような執念と誰も呼んでないのにウィンプにメイド服作りにやって来た、って時点でああ多分エタゼロ的な出会いなんだろうなぁとは分かってた！！

だってこのゲーム、マトモな廃人の比率を7だとすると3くらいの確率で常人とは違う尺度の執念で廃人やってる奴がいるからな……このエリュシオン・オートクチュールなる人物もその三割側だったということだ。

「宝石織！！ 一見、布とは…繊維とは相反する存在である鉱石を手繰り、編み上げる……っ！ なるほど盲点！ シルクレット・ビーから秘蜜の絹(シークレット・シルク)が生まれるように……っ！！ 既存常識の埒外にこそ発見はある、それを失念していた………」

この手のタイプは厄介だ、自分の世界に浸ってるんじゃなくて「相手も自分の世界にいる前提」で浸っているのでいつ話しかけられるのか分かったものではない。ラブクロックとはまた異質な強襲型コミュニケーション……聴覚はひとまずこの彫刻のような顔付きに丸刈り+クラシックなメイド服という絶対に噛み合わないはずの属性が何故か噛み合っているエリュシオン氏を意識しつつ……視界はこの地下グラウンド？ らしき場所で特訓をしていたという着せ替え隊のメンバーとその中心にいる者……ウィンプへと向ける。

「はい、うごきません。さいすんでからだをよじりません、にげません。おそいません。よくわからないけどあったかいふくがいいです……」

これゲームがゲームなら主人公キャラがブチ切れながら敵に突撃するタイプの状況やぞ。

死んだ目をしてボソボソと何かを呟きながらマネキンに徹しているウィンプを半目で見た後に着せ替え隊の連中を更に細めた目で睨みつける。奴ら目を逸らしやがった。

サバイバアルとカローシスはまだキャッツェリアだし、ヤシロバードは嬉々としてリヴァイアサンに直行。十中八九ついてくるだろうなぁ……と思っていたディプスロは意外なことに「別件がある」とどこかへ転移していった。

ので、今ここにいるのは俺だけ………サバイバアルだけでも連れて(引きずって)くるべきだったかな。

「あー、まぁなんだ。ウィンプ用の装備を作ってくれるって事ならありがたい話だし、折角だからと色々持って来たんだけ、ど………」

「サンラク君」

「あっはい」

しまった、渡すもの渡してさっさと話題を変えようとしたのに好感度が上振れ過ぎた(・・・・・・)。

俺が用意して来た鉱石織によって精製されたレア宝石布のロールを震える手で受け取ったエリュシオン氏はそれを丁寧に（インベントリにしまえばいいのにわざわざ布を地面に敷いてその上にそっと置く丁寧ぶり）置くと、肉食獣が獲物に飛びかかるが如き勢いで俺の両手を己が両手で握りしめた。

「私の、パトロン兼モデルにならないか………！？」

………………なんて？

パトロン、パトロン。要するにスポンサー的な？ まぁ言わんとすることは分かる、要するに装備作るから素材を用意して欲しいってことだろう。イムロンやビィラックに対するスタンスもパトロンと言えなくもない。

で、その上で今なんつった？ 何と兼ねろって？

「君の噂はかねがね聞いている。数々のユニークモンスター討伐に関わり、ネカマの北極星であり、アイドルプロデューサーであると……」

「えっ、風評被害？」

いや、反射的につぶやいてしまったがよくよく考えながら己の行いを省みるとそう呼ばれる心当たりがなきにしもあらず……いやネカマの北極星ってどういうこっちゃねん。あれか？ 指標って意味か？

「より多くのプレイヤー……否、このゲームのAIならばNPCにすらメイド服の"美"を啓蒙するにはまさしく星の輝きの如きモデルが必須……そう、例えば征服人形の中でも屈指の人気を誇るエルマ型、さらにそのシンボルとも言える「サイナ」……そして、」

エリュシオン氏が表示したのは一枚のスクリーンショット。

そこには、R.I.P.を装備した状態のプレイヤーが墓標の剣の上に立つ姿があった。

「───神の最高傑作たるメイド服が似合わない生物は存在しない。勿論、喪服が似合う君もだ」

たすけてうぃんぷさん！ ごるどぅにーねぱわーでおれをたすけて！！

「どうにさすなら、はものはよこでさす……たてだとろっこつにひっかかるから……」

実戦的、の意味がアクションじゃなくてサスペンスじゃねーかそれ。

・最強防具論争

シャングリラ・フロンティアにおいて最強の防具とは

レア鉱石を用いた防具である

強力なモンスター素材から作られる防具である

素材はなんでもいいから付与効果の優れた防具である

の三派が生産職を巻き込んで起こしたサービス初期に勃発した大論争。

この論争に乗じて生産職にタダで防具を作らせる、などの悪質な被害もあったが最終的に三派の提唱する「最強」の条件に合致するもの、合致しないもの、部分的に合致するものなど合計20着の「メイド服」をエリュシオン・オートクチュールが作ってみせたことで「結局のところ腕(ここ)が全て」と完全論破した。

「メイド服のやべーやつ」ことエリュシオン・オートクチュールの名はこの事件を機に広く知られることとなったが、戦術級メイド服「武凛衣(たけりえ)」の発表を最後にその姿を消すことになる……